

論文審査の結果の要旨

氏名：山本まり子

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

論文題名：平安時代書写 和漢朗詠集 諸伝本の研究

審査委員：（主査） 日本大学教授 博士（文学） 梶川 信行 ㊞
（副査） 日本大学教授 博士（文学） 阿部 好臣 ㊞
日本大学教授 藤平 泉 ㊞
大東文化大学教授 博士（文学） 藏中 しのぶ ㊞

本研究の全体像を示すために、まずは目次を提示する。それは以下の通りである。

はじめに

第一章第一節 雲紙本と関戸本との関係（一）

第二節 雲紙本と関戸本との関係（二）

第三節 雲紙本に見られる別筆

第二章第一節 伊予切の書に関する一考察

第二節 伊予切の書——粘葉本との関係——（一）

第三節 伊予切の書——粘葉本との関係——（二）

第四節 近衛本の性格——粘葉本・伊予切との関係を中心に——

第五節 伊予切の性格——粘葉本との関係を中心に——

第六節 雲紙本・関戸本と粘葉本・伊予切との関係——形態面を中心に——

第三章第一節 安宅切の位置

第二節 卷子本の位置

第三節 葦手本の位置

第四節 戊辰切の位置

第五節 葦手本と戊辰切巻上の書

第六節 山城切の位置

第七節 久松切の位置

第八節 伝藤原行成筆大字切の位置

結びにかえて

既発表論文一覧

あとがき

藤原公任（966～1041）撰の『和漢朗詠集』は、平安時代半ばまでの詩歌の粹を集めたものとして、文学史的に高い評価を受けている。また、「三蹟」の一人藤原行成（972～1027）の書として成立したこともあって、書学的な面においても、資料的な価値が高い。しかし、その諸伝本の系統などに関して、十分な研究がなされているとは言い難い。その諸伝本の本文の集成は、伊藤壽一・堀部正二両氏編『伝藤原定頼筆和漢朗詠集山城切解説及釈文』（1939）の一冊にとどまるうえに、そこには明らかな間違いも含まれる。また、『新編国歌大観』（1983～1992）の『和漢朗詠集』の本文にも、訂正すべき箇所が多い。

本書は、その伝本の書としての質に関する基礎的な研究であり、書家としての経験に基づく調査と分析を基本としている。したがって、そこに収録された個々の作品をどう読むのかということについての言及は、まったくない。排列・本文と注記の異同・文字の形などの形態的な観察・分析に徹している。その点に、申請者の研究者としての姿勢が明確に現れている。

しかし、書の評価は時に印象批評に陥りやすい。大家たちの主観的な審美眼に基づく鑑定が幅を利かせて来た面もある。そこで申請者は、できるだけ客観的に分析するために、諸本間における排列の違いや本文の異同（脱字・衍字などをも含む）の多寡、注記の有無・内容などを数量的・統計的に確認することを

試みている。その結果を集約した「伝本間の本文異同調査表」が繰り返し示される（37頁・134頁・158頁・177頁・209頁・230頁・246頁・266頁・304頁・326頁・347頁）が、それが調査の綿密さと客観性を象徴している。

調査は、雲紙本・粘葉本・近衛本・卷子本といった、よく知られた完本ばかりではなく、主要な先行研究の中ではほとんど扱われて来なかった多数の古筆切に及んでいる。大字切・伊予切・久松切・安宅切など、現在調査可能な三十種類ほどの古筆切を網羅的に調査している点も、本研究の特長の一つである。本研究は三章で構成されているが、第二章と第三章の多くの節は、古筆切に関する調査と考究であり、その大半占める。とりわけ、伊予切と久松切に関する詳細な調査は、その貴重な成果の一つとして特筆に値する。本書は、そうした長い年月にわたっての丹念で周到な調査を積み重ねた結果であり、大変な労作であると評価できる。

全体に、先行研究に丁寧にあたりつつ、800余首に及ぶ漢詩と和歌について、その一文字一文字は当然のこと、一点・一画の線質に関する地道で丹念な調査を行なっている。その特長は、本文の異同の調査にとどまらず、筆跡や書風の違いを客観的なデータで示そうとした点にある。食い込み、バネの働きなどといった筆の穂先の動きに関する微妙な身体感覚に基づく分析は、書家としての十分な経験と実績を前提としているが、それは決して感覚的な説明ではない。一字ごとに写真を示しつつ、その違いを具体的に説明しており、説得的である。また、茨城県警の科学捜査研究所が開発した「文字位置計測ソフト」を使用し、文字の位置関係、行の傾きなどを数量的に分析することも試みた。それも「文字位置計測結果」として、表の形で示されている。ともすれば、感覚的に判断されがちだった書風の問題に、客観的な光をあてることに成功している。

本研究では、上述の方法に基づく調査・分析によって、諸伝本の系統立てを試みている。その結果、もっとも有力な学説と見做されて来た、諸伝本を「初稿本」（雲紙本・関戸本）「再稿本」（卷子本・葦手本）「精撰本」（粘葉本・伊予切・近衛本・法輪寺本）という形で、一元的な成長過程と見る久曾神昇氏『仮名古筆の内容的研究』（1980）の見方に対して、根本的な見直しを迫っている。一元的な成長の結果とは捉え難いとし、雲紙本類・粘葉本類の原型は、一種に集約されると見た方が自然であるとする。また、雲紙本と関戸本は形態・本文において極めて近い位置にあり、粘葉本・伊予切・近衛本の三本も、極めて近いものと見られるとする。「諸伝本の系統立てを試みる際、卷子本・葦手本等を雲紙本・関戸本の類から切り放し、さらに、卷子本・葦手本と同じく十二世紀の書写とされている諸伝本とともに同じカテゴリ内に収めて論を進める方が整合する」と主張している。つまり、卷子本・葦手本などは「再稿本」ではなく、「同時代の諸伝本が相互に接触、混合した結果、生成された伝本の一本である」と結論づけている。それ以外にも、従来の諸説に対して根本的な見直しを迫る指摘は多い。

このように、従来の研究の不十分さと曖昧さを客観的なデータに基づいて明確にした点が、本研究の最大の成果だと言えよう。巻末に「諸伝本の系統図」（357頁）を示し、この研究の成果を一目で確認できるようにしているが、今後の『和漢朗詠集』の伝本に関する研究は、これを踏まえずに行なうことはできないだろうと思われる。

とは言え、その調査結果から結論への過程には、やや性急さも感じられる。時には、飛躍があるようにも思える。とりわけ同一人の手か否か、時代的に近いか離れているか、優れたものであるか否かという判断については、用例を調査する際の慎重な物言いと、客観的なデータとは反対に、即断・即決に見える。また、それぞれの書の評価については、二者択一的に優劣の評価が示される。書風という点についても、「文字位置計測ソフト」などによる客観的なデータの提示の一方で、「気魄」「美しさ」「冴え」「余韻」「深み」「凛とした線質」「息が通った独特の律動」「抑揚」「単調」「平板」「騒がしさ」「どことなく貧弱」など、主観的な印象に基づく評語が目立つ。

このように、研究者としての実証的な調査と、書家として長年培った直観的な審美眼が混在しており、ややバランスを欠いているようにも見える。研究者でありつつ書家でもある強みを生かそうとした試みだが、諸刃の剣の感も否めない。「研究」と銘打つならば、印象批評的な言辞は極力控えるべきではなかったかと思われる。

また、論文の書き方が専門の研究者以外にはやや難解である。『和漢朗詠集』に精通した読者ならばいざ知らず、詩歌番号のみで用例を示し、本文そのものが示されないことも多いので、データを示されたところで、本当にその通りなのか否か、直ちに判断することができない。申請者の主張の妥当性を見極めるには、別にテキストを用意し、詩歌番号などに基づきつつ、いちいち引き比べる根気のいる作業をしなければならない。初出の原稿が字数に制限のある学術雑誌等に掲載された論文だったとは言え、著書として体

系化した際に、もっと読み手に対する配慮をすべきであったと思われる。もちろん、この点は研究内容自体の信頼性と結論の妥当性を損なうものではないが、今後は、貴重な研究成果がより多くの読者に届くような工夫が求められよう。

とは言え、客観的な分析がなされて来なかったと言ってもよい領域に、新たな研究の手が入った意味は大きい。とりわけ、結論よりも、ともすれば感覚的な判断に頼って来た書風の問題に、客観的なデータに基づく分析を持ち込んだことは、大きな前進である。その点をも含め、全体として、今後の飛躍を期待させるに十分な成果であると評価できる。

よって本論文は、博士（文学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成31年 1月12日